日本文藝家協会編

代表作時代小説

第十卷

編纂委員
武蔵野次郎
尾崎秀樹　村上元三
富田常雄　山岡荘八

東京文藝社

代表作時代小説 普及版 第十巻 九五〇円

昭和五十三年十一月十五日発行

編纂者　日本文藝家協会
発行者　角谷奈良雄
発行所　株式会社東京文藝社
本　社　東京都新宿区大久保二丁目六番二号
出張所　東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六一二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

0093—789810—5170

無検印承認

まえがき

いよいよこの選集も十冊目になった。ふり返ってみると顔ぶれもだいぶ変り、作風、傾向と云ったものもかなり変った。十年一昔というから変るのが当然であろうが、この十冊の中でも、発表当時には素晴らしく新鮮さを感じさせた作品で、もうさほど魅力を感じさせなくなったものもあり、逆に大きく頷かせるものも出て来ている。やはりこれは文学性の問題であり、作者の人間の幅の問題であろう。それにしても構成の技法や描写の巧みさは眼をみはらせるものがある。総じて巧くなった……ということが、やがて総じて面白くなくなったという反語に通じる時が来まいものでもない。

そうなると、歳月の審判といったものが目に見えないところで、意地わるく作家を監視しているような気がする。この事は同じ一人の作家の足跡をたどってみてもなかなか興味深い答えを出している。

やはり十年間というのは一つの個性に照射される場合、決して短い時ではなく、この選集の持つ大きな意味をハッキリと感じとらせる。これからも、この選集は、その意味で大切にされなければならないし、ただ代表的な作品というだけではなく、何等かの問題をふくんだ、その年度の傑作であったという意味の選集に発展してゆくことが望ましい。むろん今までも、編集ではあっても、編纂委員はかなり選者としての立場もとって来たと思う。今後はその点の意味をもっと強めてもよいのではなかろうか。若し見落しがあったとしても、それはやむを得ないことだと思う。

昭和三十九年八月

山　岡　荘　八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

目

次

勘兵衛奉行記　池波正太郎　七
白い椿　伊藤桂一　二九
塔と弥三　井上靖　四七
旅芸人　大池唯雄　五九
後藤又兵衛　尾崎士郎　六七
姉妹道　木山捷平　一〇五
狼（たいしょう）　神坂次郎　一一九
陰の剣士　早乙女貢　一三九
奇蹟の武将　柴田錬三郎　一六一
斬ってはみたが　司馬遼太郎　一七五
樽屋鶴翁紀事　子母澤寛　一九三
焔の果て　杉本苑子　二〇七
新入り　多岐川恭　二三五
怒りの川　童門冬二　二四一

漂流綺譚　戸川幸夫　二六九
孤峭　中山義秀　二九一
石垣の中の二人　南條範夫　三〇一
きぬかつぎ物語　穂積驚　三一九
切腹一分前　武蔵野次郎　三三九
犬　村上元三　三三五
在藩五十余日　柳田知怒夫　三五三
親鸞の末裔たち　山岡荘八　三七五
甲子夜話の忍者　山田風太郎　三九一
残暑の道　山手樹一郎　四〇三
醜聞　山本周五郎　四二一
まえがき　山岡荘八
あとがき　武蔵野次郎

勘兵衛奉公記

池波正太郎

作者のことば

池波正太郎

この小説の主人公、渡辺勘兵衛については〔常山紀談〕をはじめとして、種々な書物に記されていますが、書いてあることは大同小異で格別気にもとめていませんでした。

別に書きたいという人物でもなかったが、西下の途次、伊勢の津市へ立寄ったところ、勘兵衛の妻女について耳にはさむところがあり、そのとき油然として執筆慾に駆られました。

この時代の男や女は、まことに溌剌と生きていたようです。

著者略歴

大正十二年一月二十五日　東京都生

東京都品川区荏原二ノ二三四

日本文芸家協会々員

著書　（小説）恩田木工、眼、信濃大名記、竜尾の剣、応仁の乱、錯乱（三十五年上半期直木賞受賞）、夜の戦士

（上演戯曲）檻の中、渡辺崋山、名寄岩、黒雲峠、牧野富太郎、賊将、その他

（現住所〒142品川区荏原二ノ二ノ二）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

一

戦国のころに〔わたり奉公人〕とよばれた武士たちがいる。

身分も家柄もなく、ただもう、おのれの槍先一つにすべてをかけ、時勢の流れ、戦局の推移にしたがい、なるべく家来にとつて分のよい主人を見つけ、何とか立身の途を切りひらこうとした連中が、それだ。

渡辺伝七郎盛もその一人で、若いころから諸方をわたり歩き、血なまぐさい戦場を駆けめぐつて総身の疵あとは十七ヵ所、左手の指三本を切りとられまでしたが、三十九歳で急死をした。

そのとき、伝七郎盛は、近江国・山本の城主、阿閉淡路守貞征の奉公人であつたが、

「う、うう……腸がねじくれる、腸があばれる……」

もがき苦しみつつも、枕頭にあつめた男一人、女二人の子供を見やり、

「勘兵衛よ。妹どもを去らせい」

と、いつた。

長男の勘兵衛了は、十六歳であつたが、十三と十になる妹二人を小さな家の外へ出し、ふたたび父のそばへ戻ると、いきなり脇差を引きぬいた。

「勘よ、何をするか――」

「父上の腹の皮を切りひろげ、腸のねじれをなおす」

「そ、その後はどうする？」

「針で腹の皮をぬう」

父親も、思わず笑つて、

「もうよいわ。わしは死ぬるのじや」

「どうせ死ぬるなら、切つて見たらよい。もしやすると、なおるやも知れぬ、のう父上――」

「まあ、よい。それよりも、きけい」

「は――」

「おぬし、若きうちに女房をもつな。この父がよい手本じや。わしは二十をこえたばかりで、おぬしたちの母の美しさにひかれ、家をもち、三人の子をもうけた。わたり奉公人の身にとつて、家をもつはさまたげとなる。それが証拠に、わしは阿閉淡路守ごとき莫迦大名の下で、もはや六年もはたらいた。厭でも仕方がなかつたのだ。去年死んだ母と、それにおぬしら三人の子を抱えては、思うさまの身うごきも出来なんだわ」

喘ぎつつ、息子の差し出した水を一口のみ、

「なれど……阿閉につかえおるうちは、骨惜しみするな。それが、のちのち、おぬしのためになることゆえ……よいか」

「はい」

「いざともなれば、妹たちは捨ておけい。女は何とでも

なる。よいか、よいか――」
「承知――」
「女なぞ、どこにもおる。だが、女房を早くもつなよ。よいか、よいか――」
「心得た、父上――」
「さらばだ、勘兵衛」
「さらば、父上――」
というわけで、伝七郎盛は死んだのだが、この翌年――天正十年の春になると、阿閉淡路守は、織田信長の麾下として甲州へ出陣した。
この戦役は、織田・徳川の連合軍が、偉大なる戦国の英雄、武田信玄の遺子・勝頼をほろぼし、名だたる甲斐の軍団を徹底的に討伐したものである。
これによつて、織田信長は、先ず〔天下人〕としての第一歩を踏み出したといつてよい。
渡辺勘兵衛了は、十七歳で、この甲州攻めに加わり、敵の首十個をはねたという。
年齢が年齢だけに、
「わつぱ。ようはたらいた」
織田信長が本陣へ勘兵衛をまねき、短刀一ふりをあたえたので、ここに、渡辺勘兵衛の名は大いにひろまつた。
「はたらきに骨惜しみするな」
遺言した父の言葉を「なるほど。このことだな――」と、勘兵衛はさとつた。
十七歳の勘兵衛の眼に、絢爛たる武装に身をかためた織田信長の鷲のようなするどい双眸の輝きと、雄大な高い鼻とが威圧的に飛びこんで来た。
すばらしい、と、勘兵衛は思つた。
(おりや、何としてもこの御方に仕えたい)
火のような野望であつた。
ところが、織田信長は、この年の夏に、西国の毛利軍の抵抗を一挙にもみつぶそうとして出陣し、途中、京都・本能寺の宿舎において謀殺された。
いうまでもなく、あの明智光秀の謀叛によつてである。
これから、豊臣秀吉が出陣中の西国から引返し、山崎の合戦に明智光秀を殲滅することになるのだが、
「さて……どちらへついたらよいものか――」
勘兵衛の主人・阿閉貞征は、きよろきよろとあたりを見まわした上で、いわゆる〔三日天下〕の明智光秀へ賭けてしまつた。この辺が勘兵衛の亡父のいう〔莫迦大名〕の所以であつたのだろう。
光秀が敗北して死ぬや、明智方に組した阿閉一族は、秀吉の命により処刑された。
これより先、近江・山本の城につめていた渡辺勘兵衛は、夜ふけに城下の自宅へ忍んで来て、るいともんの妹二人に、

「城中では、殿様はじめ重臣方が首をあつめて今後の方策を考えているようだが、とてもたよりにはならぬ。おれはどこぞへ逃げ、もう一度やり直しをするつもりだ」

と、いいわたし、

「はなればなれになるが運命だ。わかつていような」

さつさと、どこかへ姿をくらましてしまつた。

このとき、十四歳になる上の妹のるいが、しつかりともんの手をつかみ、三歳上の兄に向かい敢然といつた。

「兄さま。わたしらのことは忘れてよい」

二

渡辺勘兵衛が、主家滅亡に先だち、これを見かぎつたのはよいが、だからといつて逃亡することもなかつたのである。

主家は滅亡しても、こうした場合、家来たちは勝者の新しい戦力として迎え入れられるからだ。

いくら人手があつても足りぬ戦国の世であるから、まして〔わたり奉公人〕なぞの場合、新たな主人につかえて少しも恥ではない筈であつた。

それを、あわてて逃げ出したのは、やはり十七歳という勘兵衛の年齢が、そうさせたものであろう。

「戦場へ出ても、槍のしごきようひとつ知らぬ莫迦殿のそばにくつついているのは、もうたまらぬ」

はたらき場所は、いくらでもある。おれの槍一すじで、というのが勘兵衛の血気でもあつたのだろう。

それは、その通りなのだが、

「それからは、おれもひどい苦労をしたものでな、一時は、野伏もやつた」

と、後年になつて勘兵衛がのべている。

野伏は、土豪の下ではたらく武装の農民などが、戦争のどさくさまぎれに放火もすれば盗みもするという、まるで山賊のようなものだ。

そしてまた、勘兵衛は関東の北条氏にも、信州の真田氏にも〔わたり奉公人〕としてつかえたようである。

この間に、亡き織田信長の宿将であつた羽柴秀吉が、賤ヶ岳の戦役や、小牧長久手の戦闘を経て、ついに関白・豊臣秀吉となり天下人としての地歩をかためつつあつたのだが、勘兵衛は中央でおこなわれた著名な戦役に槍をふるう機会をもたなかつた。

そして、天正十七年の春に、久しぶりで京都へあらわれた勘兵衛を見出し、これを中村一氏へ推挙したのは、かつて没落前の阿閉家に仕えた奉公人で、いまは中村家の家臣としてかなり幅もきかせている九庄（いちのしょう）五郎という中年の武士であつた。

「おぼえておる。甲州攻めの折には亡き信長公手ずから褒美をたまわつた、あの渡辺勘兵衛か――」

と、中村一氏も大いによろこび、
「せつかく、はげみくれい」
近江・水口の居城において勘兵衛をみずから引見し、言葉をかけてくれた。
ときに、渡辺勘兵衛は二十四歳であつたが、五、六歳に見える男の子をつれていた。
「そのわつばは、何じや？」
ときく九庄五郎に、勘兵衛が苦笑し、
「それがしが子にござる」
「何……では、女房どのが……」
「女は、こやつを置いて逃げまいた。つまり押しつけられまいた。いやもう不覚のいたりでござつた」
「ほほう。そりや、どこの女子じや？」
「何、名も知れぬ汗くさき女で……」
「ふうむ……それで？」
「それだけのこと。この上、おきき下されるな」
「さようか……」
「わが子とは……」
勘兵衛は我子の頭を小突き、
「親の足をとりまするな」
と、いつた。
勘兵衛も鼻すじのきりりとしまつた好男子なのだが、子の長兵衛も垢を洗い、しかるべき衣服をつけさせると、
「まあ、可愛ゆらしい」
先ず庄五郎の妻女が手をうち、
「勘兵衛どのさえよろしければ、我手に育てとうござります」
と、いい出した。
「願うてもないこと――」
勘兵衛もおどり上り、
「これ。もはや父はなきものと思え」
さばさばと、長兵衛にいいわたしたものだ。
以後は、九家の子四人と共に、長兵衛は育つて行くことになる。
（これで、さつぱりした。もはや二度と、女には気をゆるさぬぞ）
後もふり返らず九家を出て行く勘兵衛の後姿を、五歳の長兵衛が啞のように押し黙つたまま、にらみ送つていた。
翌天正十八年の春から夏にかけて、小田原攻めがあつた。
西国・九州も征服し、徳川家康を臣従させ東海地方もおさめつくした豊臣秀吉にとつて、関東の北条氏だけが目ざわりで、
「上洛せよ」
いくら命じても、小田原城にある北条氏政・氏直の父

子はいうことをきかない。
きかぬばかりか、武蔵・相模・伊豆なぞの領民に軍役を課し、武器・弾薬の整備を急ぎ、秀吉の天下に抵抗する気配濃厚となつた。
「では、やるかの」
秀吉は悠々と陣ぶれをおこなつた。
秀吉に従う諸大名の軍勢は合せて四十万にもおよぶというのに、北条軍は八万そこそこで、これを迎えた。
この戦役は、三月から七月にわたる長期戦になり、秀吉は少しもあわてず、籠城の北条軍がうんざりするまで包囲を解かず、ついに陥落させてしまつた。
北条軍は、小田原の本城の外まわり、すなわち箱根外輪山の出城をかため、東海道から攻めこんで来る豊臣の大軍を迎え撃つたものだが、中村一氏は、箱根山の西面にあつて箱根路を扼す山中城攻略に、先ず武勲をたてた。
山中城は、東西三町、南北二町にわたる出城で、その南に岱崎の出丸があり、北条方は、松田康長・北条氏勝の四千余人をもつて、これを守らしめた。
先鋒部隊の中村一氏・堀尾吉晴・山内一豊などの兵が攻めかけ、たちまち激戦となつた。
二十五歳の渡辺勘兵衛は、手兵五十をあずけられていた。
「おれにつづけ!!」
中村一氏の馬印を部下に担がせ、
「それ、突きまくれ」
城壁にとりつくや、
「つづけ、つづけ」
勘兵衛の身につけている黒の鎧が、いつも先頭をきり、強引な突撃を飽くことなく繰り返して三の丸へ飛びこむや、
「えい、おう!!」
七尺余の鑓槍をふるつて、勘兵衛は荒れまわつた。
名のりもかけず、いちいち武勲の証拠のための首もとらず、ただ槍にまかせて突きまくり、本丸へ本丸へと突き進んだのも、勘兵衛はおのれのはたらきを見ていてくれよう主人の眼に期待をかけたからである。
三の丸から二の丸、そして本丸へと、勘兵衛の槍先が突破口をひらいた。
そして、ついに、中村一氏の馬印が真先に本丸の矢倉へ打ちたてられた。
「式部少輔が一番乗りじや」
豊臣秀吉が馬上に笑つて、
「一氏め、あれでなかなか槍先のはたらきも隅におけぬわえ」
大満足であつた。
箱根を突破し、湯本へ本陣をかまえた秀吉は、中村一

氏をまねき、
「式部。ようやつてくれた」
着ていた唐織の陣羽織をぬぎ、手ずから、これを一氏に着せかけた。
気に入りの中村一氏がすばらしいはたらきをしてくれたので、秀吉は、
「駿河十七万五千石をあたえよう」
破格の恩賞をあたえたものだ。
むろん、一氏はよろこんだ。
よろこんだのはいいが、山中城攻略の武勲を一人じめにしてしまつた。
この武勲の大半は、渡辺勘兵衛が誇つてよいものだ。
だが、それは主人の功ということであつてもよい。よいのだが、心ある主人ならば、
「これも、わが家来、渡辺勘兵衛のはたらき見事にて……」
の一言は、あつてもよい。
それが、むしろ戦国大名の常識といつてもよい。
ところが、中村一氏は、武勲のすべてを、おのれの采配一つによるものとして、
「ありがたき仕合せにござる」
いささかも、家来たちのはたらきにふれることがなかつた。

中村一氏も、阿閉貞征ほど劣等ではないのだが、表彰は一人じめにする方が快適なのは、いつの世にも変りはない。
意気揚々と、中村一氏は陣所へ引きあげて来た。
ところが、このことはたちまちにひろがり、
「渡辺勘兵衛も、つまらぬ主をもつたものじや」
諸将が、うわさをしはじめた。
こうなると、中村一氏もさすがに気がとがめたと見え、或夜ひそかに渡辺勘兵衛をよびよせ、人ばらいをした上で、
「山中でのはたらき、見事であつた」
機嫌をとるような笑いをにたにたとうかべ、
「とらせる」
秀吉のまねをして、おのが陣羽織をぬぎ、立ちあがつて来て、これを勘兵衛の肩へ着せかけようとした。
勘兵衛が、ふわりと身をかわし、一氏を見上げて痛烈な憫笑を投げた。
一氏も、どきりとしたようだが、
「とれ。とらぬか」
尚も陣羽織をあたえようとした。
「いただくこともござりませぬ」
「なぜじや？」
「なぜか……それは殿が御承知の筈――」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo